

月例研究会（2021年4月28日）

## 大学アーカイブズ研究の 成果と課題

清水 善仁

本報告は、報告者の博士論文「戦後日本の大学における歴史的資料の管理と活用に関する研究——アーカイブズの視点から」より、特に序章と終章の内容をまとめたものである。報告で触れた内容は、日本におけるアーカイブズ学研究史、大学アーカイブズ研究史、本博士論文の課題設定と結論、および今後の課題等であり、そうした点をふまえて報告タイトルを「大学アーカイブズ研究の成果と課題」とした。

本博士論文は、「大学における歴史的資料の管理と活用」という点について、大学アーカイブズの存在に注目し、アーカイブズの理念と実践の両面から分析することで、その歴史的・現代的な意義を研究したものである。こうした視点に基づく研究はこれまでもアーカイブズ学や歴史学の立場からなされてきたが、研究史を振り返りつつその成果を考察すると、理念と実践にかかる個別の論点については蓄積がなされてきたが、それらを一貫した視点から体系的に検討した研究がほとんどないことが指摘できる。大学における歴史的資料の管理および活用という営為は、それを担うアーカイブズ組織の理念と実践の多様な連関のなかで進められるものであり、ある一つの論点だけで結論を析出することは難しい。だからこそ、個別の論点を集約した総合的な研究が不可欠なのである。そこで本博士論文は、大学アーカイブズをめぐる七つの論点（理念、アーキビスト、組織戦略、

「資料関係活動」、編成・記述、アウトリーチ、教育）を取り上げて検討し、これらを体系的に位置づけることで研究の総合化を試みたのである。

先述したように、本博士論文は大学が歴史的資料をこれまでどのように管理し活用してきたのかという点が課題である。その歴史と現状を理念と実践の両面から考察することで、歴史的資料の管理と活用が親組織たる大学にもたらす価値や、そうしたシステムを整備し運営することの方法・意義を明らかにすることはもとより、そのことを通して大学がどのような社会的役割を果たしてきたかということを検討している。一方でその課題は、大学がこれからどのような役割を社会に対して果たすることができるかという点を浮き彫りにすることと表裏の関係でもある。大学やそれをとりまく制度・環境の変化にも配慮しながら先の課題を考察することで、歴史的資料の管理と活用が大学や社会にもたらす可能性についてもあわせて検討したものである。

結論では、上記の課題設定に応える形で、大学という組織が有する理念に即しつつ、運営、教育、研究、社会（社会連携）という四つの観点から、その歴史的・現代的な意義を明示した。あわせて、本博士論文の学術的意義を述べるとともに、大学における現用文書管理への考察や諸外国事例の比較検討といった課題についても指摘した。

報告後の質疑では、大学アーカイブズに対する学術研究の位置づけをはじめ、学内での大学アーカイブズ認識の浸透方法や大学アーカイブズの定義にかかわる問題について報告者の見解が問われたほか、諸外国における大学アーカイブズの形態や所蔵資料等についても議論が及んだ。いずれも重要な論点であり、今後の研究のなかで生かしていきたいと考えている。

（しみず・よしひと 中央大学文学部准教授／法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員）